

<b>Title</b>	全学礼拝の恵み：神との出会い・対話
<b>Author(s)</b>	左近, 豊
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学：論集, Volume26, 2011.3：114-123
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3262">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3262</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 全学礼拝の恵み

### 神との出会い・対話

左 近 豊

#### はじめに

ふだんキリスト教概論やキリスト教関連科目などで全学礼拝や教会の礼拝に出席を課している者としての責任から、この発題をお引き受けしました。アンケートをはじめ様々な場所で、そもそもなぜ礼拝を強制するのか、というご批判は耳にしてきました。ただ、これは個人的な思いですが、私は学生の皆さんがこの大学に在る間に、本当にいいものに触れてもらいたいと願っています。学問であれ芸術であれ、この大学には、他では触れられない宝がいくつかありますが、その一つが礼拝だと思えます。ふだん、教室や部署でそれぞれに専門の研究や学務を担っておられる方たちが、真剣に神と向き合って祈り、準備された奨励に触れることは、本学の学生にとって本当に新鮮な驚きであり、何よりも大きな証しであり、何にも代えがたい恵みであると思うからです。おそらく九割以上の学生は、それまでの人生で一度も味わったことのない体験を礼拝を通して経験していると思います。

この度は、全国のキリスト教主義学校でもおそらく例のない礼拝に関するアンケートを松田慶光さんが企画・実

行してくださり、古谷野巨先生には集計結果の読み方についてご教示いただきました。確かに、これまでもレポートを通して次のような学生たちの感想や声を聞いてきました。

【全学礼拝レポートより】

「クリスチャンでない私も、（礼拝に）参加することで恵みを受けているのだと思った。何かをしようにする時、特に生き方について問われることで、内なる自分と対話することが多くなった」（三年H・K）

「私たちは歴史やキリスト教概論にてイエスについて学んでいるが、知識は授業でさずかるが、神を知ること、神からの呼びかけを聞けるところは教会であり、礼拝なのだと思った」（三年K・T）

「クリスチャンでない人も参加すれば、心にゆとりができ、平和な世の中になっていくような気がした。少し大袈裟かもしれないが、少なくとも私はそうありたいと思った」（一年K・F）

ただレポートは記名式ですので、どうしても好意的な意見が多く見られます。中には勇気のある、そして反骨精神に富んだものも時に見られます。けれども半数近くは、義務感からか、あたりさわりのない感想で終わるものとなるのも事実でした。それに対して今回は無記名のアンケートということで、かなり正直な思い、中には怒りに似た響きも聞き取ることができたことは有意義であつたと思います。

【アンケート結果より】

中でも衝撃的だったのは、礼拝に不満足な理由 堂々第一位は「退屈だった」というものです。松田さんの発表

でも触れましたが、レポートのためだけに仕方なく出席したけれども、出てみて満足した人がある一定数おり、その最大の理由が先生方の奨励であるという励まされる結果が出た一方で、レポートのためだけに嫌々出たもの、出てみてやっぱり不満なまま終わる人たちも全体の一割以上おり、この人たちは、もう二度と礼拝なるものには出席したくない、と考えていることが窺われるのです。全学礼拝の経験が、将来なんらかのきつかけで印象が変わることも無いとは言えませんが、むしろ彼らの中にキリスト教に対する嫌悪感を植えつけ、主イエス・キリストから引き離しているとしたら、それは神の前に深く悔い改めるべき事柄だと思うのです。そしてその人たちを含めて、礼拝に否定的な理由の筆頭が「退屈」である、ということを実剣に受け止めたいと思うのです。

つい先日出た国際疫学会雑誌に「死ぬほど退屈」な思いを抱えている人の二五年後の死亡率、特に心臓疾患で死ぬ確率が顕著に高く、そうでない人の二・五倍という調査結果が出ていました。「退屈」をかこつ人は、しばしばリスキーな行動に走ったり、飲酒、喫煙、薬物摂取など心臓に悪い生活習慣が身につくせいかもしれないと書かれています。別に全学礼拝に「退屈」だから二五年後に死亡する確率が高くなるというわけではありませんが、わずかでモリスク要因となっているとしたら、これは「遺憾！」と思った次第です。

「退屈」の内容については今回のアンケートでは聞くことができませんでしたが、おそらく「ウザイ」「だるい」という学生の思いがあるであろうことは感じます。「ウザイ」「だるい」の言葉の背後には、学生たちの生きる世界にまともに向き合っていないために張られたバリア、隔ての中垣があることを痛感いたします（二〇〇九年度夏のリトリート、田澤先生講演での配布資料「岩川直樹「ウザイ」再考」参照）。全学礼拝の「退屈さ」が取り払われ、学生の生きる世界に響き、魂の叫びを神に向かって訴える場となるには、何が求められているのか、考えてまいりたいのです。そして懇談会を通して皆さまのお知恵を拝借したく思うのです。

アンケートでは、聖歌隊やハンドベルなどの音楽団体による賛美やゴスペルのある礼拝、落ち着いた雰囲気のある礼拝などを比較的多くの学生が求めていることが分かりました。これは学生に分かる要素が求められていることかと思うのです。先生や職員の方々の話も、おそらく学生にとつて分かる要素、他人事ではなく、自分に向けられているものと認識された時に最初は面倒くさいと思っていたけれど、出てみたらそうでもないと思える、さらに出てよかったという反応につながっていると言うことができるでしょう。

礼拝は、神という究極的にはとらえきれぬ方との出会いの場でありますから、どうしても分からない、ミステリアスで神秘的な部分があるものだと思いますので、全て出席者の思いや要求に迎合して、分かりやすくなければいいというものではありません。けれどもそれが疎外感や嫌悪感を生じさせるのだとしたら、それも違うと思うのです。むしろ、ヌミノーズ体験とでも言いましょうか、他では誰に対しても味わうことのない畏れ、畏怖の念、あるいは静謐な思いを呼び覚ます貴重な時、礼拝が自分とは絶対的に異なる他者であっても自分に向けての語りかけがあると感じられることが大事だと考えるのです。

## 一 神との出会いの場としての礼拝

旧約聖書以来、礼拝は「一つの対話的なやりとり (dialogic interaction)」によつて成り立って「きたと言われている」です。私がアメリカでお世話になったブリュッゲマン教授は、「礼拝には神と人という当事者が存在する。この当事者たちはその相互の「かわり合い」を通して自分たちの立場の違いを互いに明確にする一方で、当事者自身も互いに緊張した関係に置かれるのである。重要なことは、礼拝自体がそのようなやりとりが演じられる舞台であり、

そこでそれらの関係性において新しい何かが「対話的な相互交流」(dialogic exchange)を通じて生じるということである。……礼拝行為そのものが相互のかかわり合いであった。そのかかわり合いを通して、当事者同士の立場の相違も明確にされつつ、両者の相互関係は明白な形で繰り返し再構築されたのである」と述べています(W・ブリュッゲマン著『古代イスラエルの礼拝』(教文館、二〇〇八年)、二二頁)。

全学礼拝もどちらか一方の側からだけのつぶやき、monologue 独りごとで終わるのではなく、自分とは明らかに異なる者の語りかけに対する応答の場、dialogue 対話の場であるはずでしょう。応答は常に模範的な賛美とは限りません。旧約聖書、特に詩編やヨブ記という書物には、この世の不条理に晒された人たちの言葉が出てきます。その中には、ただ唯々諾々と、これも神のみ心と受け入れるのではなく、激しく抗議し、神に食ってかかり、私がこのまま死んでしまったらこの地であなを賛美する聖歌隊の大事なパートが欠けてしまいますよ(詩六・六、八八編など)、異教世界はこの成り行きを見ていて、このまま私たちを滅ぼそうものなら、あなたを侮りますよ、何だ、あの神は結局力不足で救えないのか、と馬鹿にしますよ、と脅しにも近い仕方です。ですから対話は常に緊張をはらんだものと(民数記一四章参照)。それも祈りであり、神への応答だということです。ですから対話は常に緊張をはらんだものとなります。礼拝はそういう緊迫したやりとりの場でもありうるということを聖書は教えてくれるのです。

学生たちの生活の中での様々な葛藤、やりどころのない怒りや不安が礼拝の中に(どのような形であるかは別としても)何らかの仕方では反映され、それに対する神の語りかけ、慰め、甘えを鋭くえぐるような教えが熱くやりとりされることが礼拝をさらに活性化させるのではないかと思うのです。いかがでしょう？

## 二 証言を通した神との出会い

次に神の語りかけ、慰め、教えを媒介する聖書朗読と奨励に話を移してまいりたいと思います。礼拝で奨励される方たちの言葉を通して、私たちはその方の人生にかかわられた神と出会います。私は聖書そのものが、神と出会った人たち、イスラエルの民であれ、イエスキリストの弟子たちであれ、救い主である方との出会いの証言だと思ふのです。

ご存知のように英語で旧約聖書は Old Testament と言います。「Testament」という言葉を辞書で調べますと、そこには「証言」という意味と「遺言」という意味が出てまいります。「遺言」といいますのは、死にゆく親が子供たちに言い残すことであります。聖書というものが、前の世代が次の世代への「遺言」「証言」として語り伝えたものという理解は決定的外れではないと言えるでしょう。

エジプトを出て四〇年、荒れ野を彷徨い、ついに約束の地を目前にしてヨルダン川の反対側で命尽きようとしていたモーセは、後に残される人たちに向かって、こう言い残しました。

「あなたたちは、今日わたしがあなたたちに対して証言するすべての言葉を心に留め、子供たちに命じて、この律法の言葉をすべて忠実に守らせなさい。それはあなたたちにとって決してむなしい言葉ではなく、あなたたちの命である。この言葉によって、あなたたちはヨルダン川を渡って得る土地で長く生きることができる」(申命記三二・四五―四七)

これがモーセの遺言です。ある人が言っていますが「自分の経験の押し売りだつていい、技術的な知識のつめこみだつていい、自分の死後に残すべきものはこれだ、という氣迫に裏付けられていけば、それが教育的であるかどうかといった小さな考慮は必要ない」と。死後に残すべきものは、これしかない、そういう氣迫をもって語られたのがこのモーセの遺言なのです。自分は約束の地に渡つてゆくことはできないけれど、ここで死ぬけれども、あなたたちは川を渡つてゆき、そこに新しい共同体を形づくつてゆくのだ。その時に覚えておくべきことはこれだ、このことだけは絶対に忘れてはなりませんよ、エジプトで散々な目にあつているところを救い出してくださいとくださった神様は、こう言われたのだよ、その神様とあなたたちが結んだ契約をもとにしてできるはずの社会はこういう社会なのだよ、貧しいもの、身寄りのない人、親のない子、旅人を大事にもてなす社会、それが神の民の作り出す共同体であり社会だ、と懇切丁寧に言い残したのが旧約聖書の律法だと思つたのです。モーセが遺言で遺した言葉を核にして旧約の民は信仰を培つてきたと言ふことができるのです。モーセの遺した神証言を語り伝え、語りながら生かされ、生かされて語り継いだのが旧約聖書の担い手であつたイスラエルの民なのです。それは新約聖書に引き継がれ、キリストの復活の証人として今も証言が教会を通して語り継がれていると言へるのです。全学礼拝での奨励もこの証言に連なるものなのです。

### 己が知らざる恵みの追体験

神との出会いの証言は直接その出来事を知らない世代に向けられて語られてきた点も重要だと思ひます。古代イスラエルの信仰共同体が定期的に一堂に会して救いの体験を分かち合い、救いの出来事を再現し、恵みを追体験し



てきた、という点です。体験の継承は、決して個人的なものではなかった、ということです。一人で部屋にこもって先祖の体験したことに思いを馳せ、瞑想し、思考を深めて継承してきたものではない、ということです。人々が一堂に会して、壮大な救いのドラマに参加し、語り伝えられた民族の体験に加えられてきた、ということなのです。体験が個人を越えて民全体の体験とされてゆくのです。証言を聞いた民が、証言を生きるものとされ、さらには、自分は直接体験していないけれどもその時代に相応しく証言を語ってゆくものとされてゆく。そこに証言の民、証言を聞き、語る共同体が生まれているのです。語り伝えるということが共同体を形成してきたということに留意したいと思うのです。己が知らざる恵みを追体験する場が礼拝なのです。

### 三 他人事がわが事とされるとき

全学礼拝が他人事（ひとごと）である間は「退屈」とならざるをえませんが、それが対話を迫られ、先生方によって語られた恵みをわが事として追体験する時、それは出席者を救いの物語に巻き込み、これに参加するものとするでしょう。その時に私たちはこの世の価値観だけではない、もうひとつの価値観をも手にすることになるのです。三年前に亡くなった渡辺格という分子生物学者が三〇年以上前に世に問うた書物なのですが、非常に今日の日本の社会にとつても意味があると思います。渡辺先生は「現代人の直面しているのは人工的淘汰の問題である」と述べて、第一は、現代の社会でたまたま成功し、力を持つて《優者》を自任する人々が《劣者》……を淘汰し、あるいは使役することで、自分たちだけのために、現存の文明なり社会を維持し、発展させる、という道である。第二の道は、心身障害者、老人……など、いよいよ増加すると思われる《マイナスを背負った人》と共に生き

ていこうという方向である」と言われます。そして第一の道は人類にとつて「恥多き生存」の道であるのに対して第二の道は「尊厳な人類の終焉」、人類の尊厳ある滅亡の道だと言うのです。少数の偶然的エリートだけが生き延びることで社会を維持発展させるのか、マイナスを抱えた人たちと社会的に目されている者の傍らに立ち、共に人間としての尊厳をもつて歴史の終わりを迎えるのかが問われていると言うのです。この第二の道に私は新約聖書に証しされている生き方を重ね合わせられると思うのです。

私たちが礼拝で仰ぎ見る主イエス・キリストは、その生涯において常に（この世の視点から見ても）「マイナスを負った」人たちと共にあり、究極的には最大のマイナスである罪と死を背負った全ての人間のために十字架で命を差し出し、死んでくださった。友のために命を捨てるのみならず、私たちがまだ敵であったときに、そのような私たちのために死んでくださった（ローマ五・八）方です。（「良きサマリヤ人」ルカ一〇・二五―三七も参照）。礼拝においてこの十字架を背負われたキリストに出会う時、私たちはこのキリストにならって「マイナスを背負った人たち」と共にある生き方を貰ったキリストの証人たちに連なる可能性へと開かれてゆくのだと思うのです。数え上げればきりがありませんが、アッシジのフランチェスコもマザー・テレサも、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアも井深八重さんも、シュヴァイツァーもそうですが、もつと地道な目立たぬところで「マイナスを背負った人たち」と共に、そしてその友のために命を差し出した、そのほか多くのキリストの救いの証し人たちの歩んだ道も、絵空事ではない。人生の岐路において、ありうることとして、レポートにもあったように「少し大げさかもしれないけど、私もそうありたい」と願うものへと招かれていくように思うのです。私は聖学院大学の礼拝が、学生の方々にとつて、そのような神との真剣で真実な出会いの場であつてほしいと祈り願うものです。

全学礼拝を通して神からの呼びかけに耳を傾け、嘆き、訴え、不条理を問い、神の義を問い、あるいは畏れをもつ

てみ前に崩おれ、自らを顧み、悔い改め、慰めを得、古い自分に死んで新しい人を纏い、生き方を正し、新たにされて踏み出してゆく時が与えられ続けるために、私たちがすべきことは何なのかを問い続けてまいりたいと思います。

(二〇一〇年二月十七日、二〇〇九年度「全学礼拝懇談会」発題

全体主題「全学礼拝の恵み」